# 九炭労オルグ座談会

## 日頃から気持を交いあわせよう

## みんな追い込まれている

炭労の国有化、春闘は三月下旬からいよいよ本格化するが、このほど来組された九炭労交流オルグ団のうちつぎの方々に、三池をオルグした素直な感想を語ってもらった。

出席者

高島労組組織部長　坂下政男さん（四十五才）

平山労組転場委員　中原勇さん（五十一才）

立川労組闘争委員　島田弘さん（四十一才）

明治佐賀労組労働部次長　大和王基雄さん（三十九才）

――まず三池をオルグしての感想をだし合って下さい。

【坂下さん】炭労大会の決定を浸透させる目的でオルグに入ったが、三池闘争以来ひさしぶりにきて労働運動の原則にたってねばり強い努力がされていることや、感情をのりこえて第二組合対策がなされていることには感銘をうけた。素直にいって炭鉱国有化闘争については理解はできるが、まず物価高におわれて生活が苦しいので賃金闘争を徹底的にやってくれという意見が多かった。炭労執行部は原案通りの闘いをするハラがあるのかどうか不安だといっている。これはCO闘争のときの炭労指導部のとり組み方が非常な不満を組合員や主婦にあたえているからのようだ。

【大和さん】どの地域でもいえることは、CO闘争のときの炭労のとり組みに、三池をおさえるようなうごきがあったことを不満に思っている。これは、多くの炭労の仲間が国有化闘争を通じて再三三池と交流することによって解消できると思う。基礎的な学習が非常によく行なわれていることも印象的だった。国有化闘争はわかるが最終的には反合理化―生命を守る闘いの中からすすめるべきだといわれたが、その通りだと思う。

### つかれている？

【中原さん】地域や転場とも組織化されており、第二組合対策の中で訓練されていると感じた。素直な感じでは常会、学習会が多いのでつかれているという感じだ。緊張をほぐす機会ももってもらいたい。

### 気持がかよいあわない

【島田さん】各地で他のヤマの闘う姿勢はどうかときかれた。三池は生命を守る闘いを中心にすえて闘いをすすめているが、立川労組では各組合員が転場の中で実質賃金獲得、保安闘争、転制の抑圧に対する民主化闘争を並行してやっている。国有化闘争体制は、各支部自らの対資本要求をすすめなければできないということでは私と意見は一致した。三池闘争以来炭労の各支部交流があまりにも少ない。どんなことでは炭労同志で気持がかよいあわないのではないか？お互いの中で自分たちの問題はどこにあるのかという学習がつみ重ねられないとダメだ。今後、闘争の終結をするときは全組合員が納得いくような仕方をすべきだと思う。

### 差別にどう闘うか

【坂下さん】現場では極端な差別をうけている組合員が、三池ダマシイをもって頑張っていることが一斉に街頭ビラ、署名を行ない、三池労組も大牟田、福岡などで行動した。

このほか、十八日以降はステッカーはり、抗議行動、はがき戦術などが開始され、三月二十日にはこのような行動のつみ重ねの上に、炭労拡大中闘、さらには二十一日には各支部代表者会議がひらかれ四月段階での実力行使にまで高められる。

――いよいよ三月下旬から実行動にはいるわけですが、その決意を

【島田さん】われわれは三池労組の組合員にくらべたら賃金は高いかもしれないが、十三時間、十四時間という労働をさせられ、体をこわし、家庭を破壊されている。いまの増産体制の中で強度の労働強化をさせられている。ビルドヤマやスクラップヤマと区別され残るとか残らないというより、その攻撃の本質をふかめ、闘う必要があることを三池の地域交流から感じた。ぜひ交流をふかめていきたい。

↑石炭政策のもと、ビルド・スクラップの別はない（飯野炭鉱で）

## オルグ交流や署名活動

### 本格化する国有化春闘

炭労の国有化春闘は一万円賃上げとともに動きだしたが、まずその行動の第一段階として、九州炭労内部での各山交流オルグが行なわれ、同時にニュース・カーによる交流情宣が行なわれた。

この座談会は三月十一日、十二日に三池労組に来組された方々のものであるが、同時に三池労組からも四名の代表が九炭労傘下各支部にオルグに出かけた。

同時にニュース・カー「はたかぜ」も三月十四、十五日の両日、長崎、佐賀の各ヤマに情宣に行った。

三月十七日には九炭労全山には頭が下がった。採炭で二万四・五千円という低賃金の中で頑張っている組合員についてどういう反対闘争を組んでいるのか？　炭労中央部もどうしようとしているのか？　素直にききたいと思う。また、九州地区でもいいから炭鉱労働者のもっている考え方をお互いに交流する必要がある。九州地区でも各種集会に炭労傘下の各組合がきているが、こんな集会のあとには九炭労などが音頭をとって交流会をする努力をするべきではないか。

### 企業意識をすてて

【島田さん】国有化闘争を春闘の中で出発するためにもCO闘争「生命を守る」闘いと結合させなければならない。なぜこれがピンとこないのかCO闘争も立川は有数のガスヤマなので理解できる。しかし、いままでは保安闘争をあまりやりすぎると、三池と立川では経営基盤がちがうので「金がない」といわれたら、それでしまいだと思っていた。しかし、いつまでも、こんなことをいっていては利用されるだけだ、企業意識を脱皮して人間として許せないという立場で国有化闘争をやらねばならない。

【坂下さん】きのう熊大へ宮嶋さん受川さんの実態を見に行き、二度とこんな災害をおこさないために保安闘争をすすめたいと思った。出費はかかると思うが、CO患者、家族との交流が不足しているので交流をぜひ行いたい。CO闘争のオルグ交流のときに各支部でも受け入れが消極的な様子だったときいている。三池の責任ではないにしても炭労中央の、けいもう指導が不足していると思う。

残る、残らないではない！

## 私の書棚

### ゴーリキーに学ぶもの

＝生誕百周年によせて＝

山田清三郎

三月二十八日は、ロシアのうんだ世界的文豪マクシム・ゴーリキーの生誕百周年にあたります。ゴーリキーは一九三六年六月十八日モスクワ郊外ゴルキで没しましたが、彼の七十三年の全生涯は、われわれ日本の働く者にも、かぎりなくゆたかな、貴重な教訓をなげかけています。

十一才から生きるために働かねばならなかったゴーリキーは、店員、汽船の皿洗い、工房の徒弟、仲仕、パン焼き職人、鉄道工場労働者などを転々とし、二十才前後には、マルクス主義サークルの会合に出たりしましたが、精神的な悩みと肉体的な苦しみのために、自殺をはかって失敗しました。

一八九二年、処女作「マカール・チュードラ」を発表したゴーリキーは、翌九三年には一連の短編小説を相ついで公にし、いらい労働者出身の作家として「チェルカッシュ」「イゼルギリ婆さん」「海ツバメの歌」「どん底」「母」「敵」などを、そして十月社会主義革命後には、「幼年時代」「私の大学」「クリム・サムギンの生涯」その他の作品をかき、社会活動でも活躍しました。

「レーニンはゴーリキを、「芸術家としての才能によって、ロシアの労働運動のみならず、世界の労働運動にも大きな貢献をした」と評価しましたが、戦前日本のプロレタリア文学も、ゴーリキーからは強い影響をうけ、たとえば小林多喜二なども、はじめてゴーリキーの作品をよんだときの感動を、一九二六年九月の日記に書きのこしています。

マクシム・ゴーリキーは、労働者出身の革命的作家として、労働者がほんらいもっているその可能性を、その努力をとおして、みごとに開花させ、結実させました。その意味で、まだ、人民解放の途上にある日本の労働者と勤労人民にとっても、かがやかしい希望の星を彼のうえにみることができます。

（やまだ・せいざぶろう＝作家）

## 敗色濃いアメリカ

国際問題評論家　梶谷善久

いまアメリカ本国から着いたばかりと思われる一団が、輸送担当将校のメガホンによる注意を聞いていた。アメリカ兵らしい陽気さはなく、みな緊張し切った顔をしていた。一月の中ごろサイゴンのタンソニユット空港でみた風景だ。

四度目に訪れたこの米軍司令部所在地の空気はガラリと変っていた。朝から酔払ってわがもの顔に町を横断していたアメリカ兵が、いまは三、四人ずつかたまって何となくしょんぼりしている。シクロ（輪タク）の運転手たちもかれらをこわがらなくなって、ケンカをすればアメリカ兵が袋だたきになる。

袋だたきにされるのは路上のアメリカ兵だけではない。テト（旧正月）に一斉攻撃を開始した南ベトナム解放戦線によって、各地の米軍基地が散々にたたかれただけでなく、南ベトナムにおけるアメリカの威信を象徴するサイゴンの米大使館へ突入され、わずか二十人の兵士によって六時間も占拠された。

このときウエストモーランド米派遣軍司令官は「ベトコンが大使館内に侵入した事実はない」といいジョンソン大統領は「敵の攻撃計画は失敗した。新たに増派する必要はみとめない」と記者会見でのべた。

大使館は侵入どころか占拠されたのであり、大統領の強気の発言は二週間もたたぬ間に一万人余りのベトナム増派となって裏切られた。

### 昔樞軸、いま対米依存

世界最大の原水爆保有国アメリカが、原子力空母エンタープライズを北朝鮮沖にさし向けても、北朝鮮がビクともしない現実を自民党政府はどうみているのか。武力でおどしつける十九世紀の砲艦政策は、今日では通用しないのだ。核のカサに守られているから日本は安全だと佐藤首相が語っても、空々しい神話にすぎない。

ベトナムへ行く前に、私はしばらくカンボジアに滞在した。この国の軍隊はわずかに三万五千、王室儀礼兵にすぎない存在だ。またカンボジアは東にベトナム、西にタイにはさまれ、北には巨人中国がある。国際緊張の谷間にいるといってよい。しかもこの国が平和を保っているのは、厳正な中立非同盟政策を貫いているからだ。佐藤首相もすこしはシアヌーク元相のやり方に学べばよい。

アメリカの軍事力は、南ベトナムの民衆抵抗の前に、屈辱的な敗北を浴びようとしている。しかもなおわが政府は、七億人口の隣国中国を敵視しても、対米協力と防衛強化の道をまっしぐらに進んでいる。東条政権の道を佐藤政権はたどろうとしているのではないか。